

おお、定年 加藤仁

1988年の本。500人に当たり、150人分を本に書いた。

・百名山の登攀をめざす元NHKマン

「在職中は心不全の寸前。低血圧にも悩まされてね。午(ひる)をすぎると心臓が痛みはじめ、アブラ汗が流れる。いきおいクスリでまぎらすので、こんどは副作用に襲われる。このままでは命をおとすと思って、定年の一年前に退職しました」

奥さんと歩いていても「おとうさん、はやく！」とせつつかれるほどの衰弱ぶり。退職後を体力づくりに賭け、あらためて再スタートを期さねばならない。「マラソン可能な体力」を目標にして、まず走る。当時はジョギングなるシャレたことばもない。一〇〇メートル走って一〇〇メートル歩く、それを根気よく繰り返す。へこたれると、そこには「クスリ漬けの人生」しかない。こうして五年間かけて皇居一周(約五キロ)を走れるまでになった。勢いにのって青梅マラソンの三〇キロコースやフルマラソン四二・一九五キロも完走。人間の底知れない生命力を、身をもって感じた。

自信をえて六十歳からは「日本の百名山の登攀」をさらなる目標に掲げて、これまでに約半分を制覇。「先日も五日分の食料と寝具をかついで南アルプスを縦走しました」

・老いてなお働く喜びを句に託す

「同期の連中が、しだいにボケていくんですよ。人間、生あるうちは働くべきだ、休めば錆びつくと思いました。」

・・・

掃除係でも留守番でも、その会社になくてはならない人間になろう。電話番号といえども、“会社の顔”、きちんと受け応えしよう。

・自宅で発明三昧の元航空技術者

たったひとりの開発テーマは「水力エネルギーの再利用」。最初、海の波による発電システムを想いかべた。しかし構想が雄大すぎて実現しそうにない。そこで発想を転換して、簡便な発電装置を生みだすべく突っ走ってゆく。

「古くから伝わる米つき水車からヒントをえましてね」

まず上から水をたらして水車をまわす方式を考えてみた。ところがこれでは活用できる場所がかぎられ、普及しそうにない。そこで横から水を流して水車を回転させる。これならば世に迎えられる可能性はある。

「たとえばサーフボードに水車を積み、川に浮かべておくだけで発電できる。持ち運びもできて付帯工事も必要ない。開発途上国の僻地やキャンプ地で役立つと思いますよ」

もともと航空機を専門とする田上さんは、水車の羽根にも揚力の原理を応用して、すばやく回転させた。計測器も実験設備も整っていない自宅で、理にかなう製品をこしらえるのは並大抵のことでない。それをやり遂げるのは、たしかに「執念」しかない。

二年後、試作品が完成した。筑波大の協力により、学内の“流れる水槽”に浮かべることになった。直径一・五メートルの水車がいきおいよくまわる。実験の結果、ふつうの溪流の速度で二キロワット／時の電力を起こせる。この一台で一般家庭の電力量はじゅうぶんまかなえる。夏には鮎漁がおわるのをまって溪流でも実験を試みる。

「苦心惨憺の発明ですね。いちばん気になるのは人生の持ち時間がすくないことです。はやく技術屋として証しをたてたい」

お役ご免と年金生活に突入し、生活の糧よりもこころの糧を求める人生もある。ゲートボールと民謡だけが高齢者の趣味とはかぎらない。小説や自伝の執筆、演歌の作詞、ルーツ調査、私小説の研究、地名調べ、シルクロード探査、私設図書館の運営、案山子の撮影、中国の人びととの文通、翻訳、大学・成人学校への入学、世にもめずらしい楽器の演奏、木製ヒコーキの製作、芸人志願、ドライブ、水泳、テニス、居合い抜き、合唱……。肝腎なのは自分ならではの趣味やライフワークを見つけることである、と教えられた。

とりわけ勇気づけられたのは、老いてからスポーツに挑み、若輩の私も顔負けの記録を誇っているひとたちである。それまで体験がなくとも、病弱をかこっていても、六十歳を過ぎてからフルマラソンに出場したり、高峰に登頂したり、肉体は蘇るという見本を目のあたりにして、奮いたった。

そこにあるのは退屈きわまりない画一的な老後でなく、潤いある多彩な老後である。